

## 2 オランダの繁栄と英仏の追いあげ

### オランダの独立と商業覇権

- (1) オランダの独立
- ① ネーデルラント…毛織物業や商業で発展, 南部のアントウェルペンは国際商業の中心地
  - ② スペインの[①]によるカトリック強制などにネーデルラントの貴族や[②]派が反抗  
→ [③]戦争(1568～1609)がはじまる
  - ③ 戦争の経過…カトリックの強い南部10州(のちのベルギー)は途中で脱落  
→ 北部7州(ホラント州)が中心に[④]を結成(1579), イギリスの援助を受ける  
→ 1581年に独立を宣言し,[⑤]を統領とするネーデルラント連邦共和国が成立
- (2) オランダの繁栄

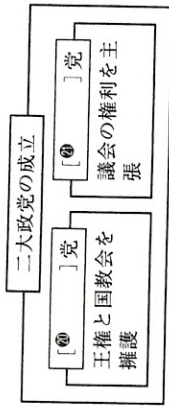
- ① 最先端の造船技術をもち, 世界全体に貿易網→英・仏に先がけて世界経済の中心に  
→ 「国際法の父」とよばれる[⑥]は「海洋自由論」でオランダの海洋進出を擁護
- ② 首都アムステルダムはアントウェルペンに代わって国際商業と金融の中心として繁栄

### イギリスの内乱-ピューリタン革命

- (1) エリザベス1世が没して[⑦] (位1603～25)が即位(=[⑧]朝)が成立
- ① 王は[⑨]説を唱えて議会を軽視し, ビューリタンを任命
  - ② [⑩] (位1625～49)の専制政治  
→ 議会は[⑪] (1628)で不当な課税や逮捕をしないことを王に求める(王は議会を解散)  
→ スコットランド反乱鎮圧の戦費調達のために王が議会を開催(1640, 短期議会・長期議会)  
→ 国王と議会の対立(王党派と議党派の間で内乱となる)
  - ③ 独立派(議党派の一派)の[⑫]が鉄騎隊を編成して王党派軍をやぶる  
→ 急進的な水平派と結び穏健な長老派を追求, 国王を処刑(1649), 共和政を樹立  
→ これを[⑬] (1642～49)という
- (2) クロムウェルの独裁
- ① 中産階級やジェントリの利益を擁護→急進的な水平派を弾圧
  - ② 王党派の強い[⑭]と長老派の本拠地であったスコットランドを征服  
→ この間, 共和国はオランダに打撃を与えるため[⑮]を制定(1651)→第1次[⑯]戦争(1652～54)へ
  - ③ 護国卿に就任(1653)して軍事独裁(国民の不满)→死後, 先王の子[⑰]が王位に(1660)

### 名誉革命と立憲王政

- (1) 王政復古
- ① チャールズ2世(位1660～85)の親カトリック政策  
→ 議会在反発
  - [⑱] (1673)…非国教徒が公職につくことを禁止
  - [⑲] (1679)…不当な逮捕や投獄を禁止
  - ② [⑳] (位1685～88)もカトリックの復活をはかる  
→ トーリー党とホイッグ党は王の娘メアリーとその夫オランダ統領ウィレムに援助を要請(1688)  
→ オランダ統領ウィレムのイギリス上陸でジェームズ2世は亡命(これを[㉑]という)



## (2) 立憲王政の確立

- ① [㉒] (位1689～1702)と[㉓] (位1689～94)の即位(←議会による「権利宣言」を承認)  
→ 権利宣言を[㉔]として制定し, 立憲王政が確立
- ウィリアム3世のもとにオランダと同君連合となり, フランスの強大化を阻止する政策に転換
- ② 女王[㉕] (位1702～14)がスコットランドを合併し,[㉖]王国が成立(1707)  
→ アンの死去によりステュアート朝が断絶
- ジェームズ1世の血をひく[㉗] (位1714～27)が即位(=[㉘]朝)の成立
- ドイツ出身の王は英語を解さず, 内閣が国政をとるようになる
- ③ ホイッグ党の[㉙]のもとで責任内閣制が成立  
→ 内閣は国王ではなく議会对して責任を負う(「王は君臨すれども統治せず」という伝統が誕生)

## フランスの内乱

- (1) 国内の宗教対立…カルヴァン派のユグノーとカトリック教徒の対立
- ① 宗教対立に大貴族間の勢力争いがからみ,[㉚]戦争が勃発(1562～98)
  - ② サン＝バルテルミの虐殺(1572)…カトリック派がユグノー派を襲い, 数千人を虐殺
  - ③ ユグノー戦争中にヴァロワ朝が断絶(1589)→ユグノーの指導者[㉛]が[㉜]朝を開く
- (2) アンリ4世(位1589～1610)の政治
- ① 宗教対立を収束させるためにカトリックに改宗
  - ② [㉝]を発布(1598)…個人の信仰の自由を認める(ユグノー戦争終結)
  - ③ [㉞] (位1610～43)の時代…宰相[㉟]が補佐
  - ④ 大貴族やユグノーをおさえて王権を強化
  - ⑤ ハプスブルク家に対抗するため三十年戦争に介入
  - ④ [㊱] (位1643～1715)の時代…幼時は宰相[㊲]が補佐  
→ 中央集権化に反対する高等法院や貴族, 民衆が[㊳] (1648～53)をおこす

## フランス絶対王政の追求

- (1) ルイ14世(「太陽王」)の親政(←宰相の死後)
- ① 王権神授説を唱え, 君主権の絶対・万能を主張(絶対主義, 「朕は国家なり」)
  - ② 財務長官に[㊴]を登用して徹底した重商主義政策を推進
- (2) ルイ14世の侵略戦争と経済の沈滞
- ① 数々の侵略戦争のうち,[㊵] (1701～13)で英・蘭・墺と戦う  
→ [㊶]条約(1713)でルイ14世の孫がスペイン王位に(イギリスに植民地の一部を奪われる)
  - ② 長年の戦争と宮廷の浪費のため国民は重税に苦しみ, 各地で農民一揆
  - ③ [㊷]を廃止(1685)→ユグノーの商工業者が新教国に移住し, フランス経済は打撃

## 重商主義政策と商工業の発展

- (1) 重商主義…貨幣の獲得を重視し, 貿易によって富を増やす(イギリスの航海法やフランスの Colbert による王立マニュファクチュアの育成などが例)
- (2) 商業資本家が同屋敷家内工業を始め, マニュファクチュアを経営する産業資本家が登場